第22回夏期福音特別集会（4）（鹿沢）
第三回伝道旅行及びローマへの途
――使徒行伝第18～28章――

１９７５年８月24日
小池辰雄

パウロの最後の伝道　霊止　キリスト道　霊光・霊波・霊火　捨身の祈り　聖霊の囚人　伝道の使命果てるまで　弔合戦　幕屋の構造　深い涙のひと　南無キリスト　パウロの弁明　ローマへの船路　「パウロ・イスト・ニッヒツ」　キリストを体現していく　祈り

【使徒18】

23 此処に暫く留まりて後また去りてガラテヤ、フルギヤの地を次々に経て凡ての弟子を堅うせり。

24 時にアレキサンドリヤ生まれのユダヤ人にて聖書に通達したるアポロと云う能弁なる者エペソに下る。25 この人はさきに主の道を教えられ、ただヨハネのバプテスマを知るのみなれど、熱心にして詳細にイエスの事を語り、かつ教えたり。26 かれ会堂にて臆せずして語り始めしを、プリスキラとアクラと聞きいて之を迎え入れ、なおも詳細に神の道を解き明かせり。27 アポロ遂にアカヤに渡らんと為たれば、兄弟たち之を励まし、かつ弟子たちに彼を受け容るるように書き贈れり。彼かしこに往き、既に恩恵によりて信じたる者に多くの益を与う。28 即ち聖書に基き、イエスのキリストたる事を示して、激甚くかつ公然にユダヤ人を言い伏せたるなり。

【使徒19】

1 斯てアポロ、コリントに居りし時、パウロ東の地方を経てエペソに到り、或る弟子たちに逢いて、2 『なんじら信者となりしとき聖霊を受けしか』と言いたれば、彼等いう『いな、我らは聖霊の有ることすら聞かず』3 パウロ言う『されば何によりてバプテスマを受けしか』彼等いう『ヨハネのバプテスマなり』4 パウロ言う『ヨハネは悔改のバプテスマを授けて己に後れて来るもの（即ちイエス）を信ずべきことを民に云えるなり』5 彼等これを聞きて主イエスの名によりてバプテスマを受く。6 パウロ手を彼らの上に按きしとき、聖霊その上に臨みたれば、彼ら異言を語り、かつ預言せり、7 この人々は凡て十二人ほどなり。

8 ここにパウロ会堂に入りて、三个月のあいだ臆せずして神の国に就きて

論じ、かつ勧めたり。9然るに或者ども頑固になりて従わず、会衆の前に神の道を譏りたれば、パウロ彼らを離れ、弟子たちをも退かしめ、日毎にツラノの講堂にて論ず。10斯すること二年の間なりしかば、アジヤに住む者は、ユダヤ人もギリシヤ人もみな主の言を聞けり。11而して神はパウロの手により尋常ならぬ能力ある業を行いたもう。12即ち人々かれの身よりあるいは手拭あるいは前垂をとりて病める者に著くれば、病は去り悪霊は出でたり。13ここに諸国遍歴の呪文師なるユダヤ人数人あり、試みに悪霊に憑かれたる者に対して、主イエスの名を呼びて『われパウロの宣ぶるイエスによりて、汝らに命ず』と言えり。14斯なせる者の中に、ユダヤの祭司長スケワの七人の子もありき。15悪霊こたえて言う『われイエスを知り、又パウロを知る。然れど汝らは誰ぞ』16斯て悪霊の入りたる人、かれらに跳びかかりて二人に勝ち、これを打拉ぎたれば、彼ら裸体になり傷を受けて其の家を逃げ出でたり。……20主の言、大いに弘りて権力を得しこと斯の如し。

21此等の事のありし後パウロ、マケドニヤ、アカヤを経てエルサレムに往かんと心を決めて言う『われ彼処に到りてのち必ずロマをも見るべし』22斯て己に事うる者の中にてテモテとエラストとの二人をマケドニヤに遣し、自己はアジヤに暫く留まる。……

【使徒20】

1騒乱のやみし後、パウロ弟子たちを招きて勧をなし、之に別を告げ、マケドニヤに往かんとて出で立つ。2而して、かの地方を巡り多くの言をもて弟子たちを勧め後、ギリシヤに到る。3そこに留まること三个月にしてシリヤに向かいて船出せんとする時、おのれを害わんとするユダヤ人の計略に遭いたれば、マケドニヤを経て帰らんと心を決む。……6我らは除酵祭の後、ピリピより船出し、五日にしてトロアスに著き、彼らの許に到りて七日のあいだ留まれり。

7一週の首の日われらパンを擘かんとて集りしが、パウロ明日いで立たんとて彼等とかたり、夜半まで語り続けたり。8集りたる高楼には多くの燈火ありき。9ここにユテコという若者窓によりて坐しいたるが、いたく眠気ざすほどに、パウロの語ること愈々久しくなりたれば、遂に熟睡して三階より落つ。これを扶け起こしたるに、はや死にたり。10パウロ降りて其の上に伏し、かき抱きて言う『なんじら騒ぐな、生命はなお内にあり』11すなわち復のぼりてパンを擘き、食してのち久しく語りあい、夜明に至り遂に出でたてり。12人々かの若者の活きたるを連れきたり、いたく慰籍を得たり。

13斯て我らは先立ちて船に乗り、アソスにてパウロを載せんとして彼処に

船出せり。……

17而してパウロ、ミレトより人をエペソに遣し、教会の長老たちを呼びて、
18その来りし時、かれらに言う『わがアジヤに来りし初の日より如何なる状にて常に汝らと偕に居りしかは、汝らの知る所なり。19即ち謙遜の限をつくし、涙を流し、ユダヤ人の計略によりて迫り来し艱難に耐えて主につかえ、20益となる事は何くれとなく憚らずして告げ、公然にても家々にても汝らを教え、
21ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対して悔改め、われらの主イエスに対して信仰すべきことを証せり。22視よ、今われは心搦められて、エルサレムに往く。彼処にて如何なる事の我に及ぶかを知らず。23ただ聖霊いずれの町にても我に証して縄めと患難と我を待てりと告げたもう。24然ど我わが走るべき道程と主イエスより承けし職、すなわち神の恵みの福音を証する事とを果たさん為には固より生命をも重んぜざるなり。25視よ、今われは知る、前に汝らの中を歴巡りて御国を宣伝えし我が顔を汝ら皆ふたたび見ざるべきを。26この故に、われ今日なんじらに証す、われは凡ての人の血につきて潔よし。27我は憚らずして神の御旨をことごとく汝らに告げしなり。28汝等みずから心せよ、又すべての群に心せよ、聖霊は汝らを群のなかに立てて監督となし、神の己の血をもて買い給いし教会を牧せしめ給う。29われ知る、わが出で去るのち暴き豺狼なんじらの中に入りきたりて群を惜まず、30又なんじらの中よりも、弟子たちを己が方に引き入れんとて、曲れることを語るもの起こらん。31されば汝ら目を覚しおれ。三年の間わが夜も昼も休まず、涙をもて汝等おのおのを訓戒せしことを覚えよ。32われ今なんじらを、主および其の恵の御言に委ぬ。御言は汝らの徳を建て、すべての潔められたる者とともに嗣業を受けしめ得るなり。33我は人の金銀・衣服を貪りし事なし。34この手は我が必要に供え、また我と偕なる者に供えしことを汝等みずから知る。35我すべての事に於て例を示せり、即ち汝らも斯く働きて、弱き者を助け、また主イエスの自ら言い給いし「与うるは受くるよりも幸福なり」との御言を記憶すべきなり』

36斯く言いて後、パウロ跪づきて一同とともに祈れり。37みな大に歎きパウロの頚を抱きて接吻し、38そのふたたび我が顔を見ざるべしと云いし言により特に憂い、遂に彼を船まで送りゆけり。

【使徒21】

13その時パウロ答う『なんじら何ぞ歎きて我が心を挫くか、我エルサレムにて、主イエスの名のために、唯に縛らるるのみかは、死ぬることも覚悟せり』

【使徒22】

1『兄弟たちよ親たちよ、今なんじらに対する弁明を聴け』2人々そのヘブルの語を語るを聞きてますます静かになりたれば、又いう、……7その時われ地に倒れ、かつ我に語りて「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか」という声を聞き、8「主よ、なんじは誰ぞ」と答えしに「われは汝が迫害するナザレのイエスなり」と言い給えり。……16今なんぞ躊躇(ためら)うか、起(た)て、その御名を呼び、バプテスマを受けて汝の罪を洗い去れ」……19我いう「主よ、我さきに汝を信ずる者を獄に入れ、諸会堂にて之を打ち、20又なんじの証人ステパノの血の流されしとき、我もその傍らに立ちて之を可(よ)しとし、殺す者どもの衣を守りしことは、彼らの知る所なり」……

【使徒23】

1パウロ議会に目を注ぎて言う『兄弟たちよ、我は今日に至るまで事毎に良心に従いて神に事(つか)えたり』……11その夜、主パウロの傍らに立ちて言い給う『雄々しかれ、汝エルサレムにて我につきて証(あかし)をなしたる如く、ロマにても証をなすべし』……

【使徒24】

1五日ののち大祭司アナニヤ数人の長老およびテルトロと云う弁護士とともに下りて、パウロを総督に訴う。2パウロ呼び出されたれば、テルトル訴え出でて言う『ペリクス閣下よ、われらは汝によりて太平を楽しみ、……5我等この人を見るに恰(あだか)も疫病のごとくにて、全世界のユダヤ人のあいだに騒擾(さわぎ)をおこし、且つナザレ人の異端の首(かしら)にして、6宮をさえ瀆(けが)さんと為(し)たれば之を捕えたり。……14我はただ此の一事を汝に言いあらわさん、即ち我は彼らが異端と称うる道に循(したが)いて我が先祖たちの神につかえ、律法と預言者の書とに録したる事をことごとく信じ、15かれら自らも待てるごとく義者と不義者との復活あるべしと、神を仰ぎて望みを懐(いだ)くなり。……

【使徒25】

1フェスト任国にいたりて三日の後、カイザリヤよりエルサレムに上りたれば、……

【使徒26】

1アグリッパ、パウロに言う『なんじは自己のために陳(の)ぶることを許されたり』ここにパウロ手を伸べ、弁明して言う、2『アグリッパ王よ……24パウロ斯く弁明しつつある時、フェスト大声に言う『パウロよ、なんじ狂気せり、博学なんじを狂気せしめたり』25パウロ言う『フェスト閣下よ、

我は狂気せず、宣ぶる所は真にして慥なる言なり。……
28**アグリッパ、パウロに言う『なんじ説くこと僅にして我をキリステアンたらしめんと為るか』**29**パウロ言う『説くことの僅なるにもせよ、多きにもせよ、神に願うはただに汝のみならず、凡て今日われに聴ける者の、この縲紲なくして我がごとき者とならんことなり』……**

【使徒27】

……14**幾程もなくユーラクロンという疾風その島より吹きおろし、**15**之がために船は吹流され、風に向かいて進むこと能わねば、舟を風の追うに任す。……**

31**パウロ、百卒長と兵卒らとに言う『この者等もし船に留まらずば、汝らは救わるること能わず』**32**ここに兵卒ら小船の綱を断切りて、その流れゆくに任す。**33**夜の明けんとする頃パウロ凡ての人に食せんことを勧めて言う『なんじら待ち待ちて、食事せぬこと今日にて十四日なり。……**

【使徒28】

……5**パウロ蛇を火のなかに振り落して何の害をも受けざりき。人々は彼が腫れ出づるか、または忽ち倒れ死ぬるならんと候う。**6**久しく窺いたれど、聊かも害を受けぬを見て、思いを変えて、此は神なりと言う。……**

●パウロの最後の伝道

今日はパウロの最後の伝道と最後の道行ということになります。使徒行伝18章23節から、

23此処に暫く留まりて後また去りてガラテヤ、フルギヤの地を次々に経て凡ての弟子を堅うせり。

パウロは伝道した後で、「大丈夫かなぁ」というわけで、また地固めをしに行く。

24時にアレキサンドリヤ生まれのユダヤ人にて聖書に通達したるアポロと云う能弁なる者エペソに下る。25この人はさきに主の道を教えられ、ただヨハネのバプテスマを知るのみなれど、熱心にして詳細にイエスの事を語り、かつ教えたり。

「熱心にして」、これは人間的な熱心です。

「ヨハネのバプテスマ」

では本当の新生まではこない。いわゆる信仰の熱心な人という部類のチャンピョンがこの「アポロ」です。イエスについてはなかなかよく知っている。そういう伝道者がたくさんいます。福音について、聖書について語る。我々は聖書について語りません、聖書の中からものを言います。中からものを言うのは告白という。いわゆるお説教ではない。

アポロは残念ながら、「について」詳しい人であり、「に対して」熱心な人であった。に対

して熱心であるとか、について詳しいということは、まだ次元が手前です。の中からの情熱、の中からの告白が大事なんです。だから、聖書を――日蓮の言葉ではないが――身体で読む、

「身読せよ」

という。頭で読んでもダメ、心で読んでもまだダメ。

「全存在で読みなさい」

ということです。

26かれ会堂にて臆せずして語り始めしを、プリスキラとアクラと聞きいて之を迎え入れ、なおも詳細に神の道を解き明かせり。

摂理、経綸について解きあかした。アポロはなかなか大した説教者、伝道者であります。

27アポロ遂にアカヤに渡らんと為たれば、兄弟たち之を励まし、かつ弟子たちに彼を受け容るるように書き贈れり。彼かしこに往き、既に恩恵によりて信じたる者に多くの益を与う。

始めは、について分かっても、について語っても悪くはない、結構なんです。しかし、そういうことを長いことやっていると、しまいには、飽きてしまってくたびれてしまう。

28即ち聖書に基き、イエスのキリストたる事を示して、激甚くかつ公然にユダヤ人を言い伏せたるなり。

能弁家ですからね。

「雄弁は銀にして、沈黙は金なり」

という言葉がある。「沈黙は金なり」ということはただ黙っていることではない。本当の沈黙は、これはもう表現できなくて、仕方がなくて、絶言してしまう。絶言絶慮してしまう。これが本当の沈黙です。だから、「沈黙は金なり」というのはその角度から真理であります。私が今、私の胸の中に澎湃たるものを、ある程度は語りますけれども、私がここで黙って立っていて、君たちがそれを内観し、そしてキャッチできれば、それは一番本当のことになるわけです。以心伝心、心から心に伝わる。以霊伝霊といっても構わない。或る次元で共通なところにくると、そうなんです。

●霊止

19章です。

1斯てアポロ、コリントに居りし時、パウロ東の地方を経てエペソに到り、或る弟子たちに逢いて、2『なんじら信者となりしとき聖霊を受けしか』と言いたれば、彼等いう『いな、我らは聖霊の有ることすら聞かず』

この質問はパウロらしいですね。アポロはいろいろ詳しいから、アポロにえらく満足してるわけだ。ところが、パウロは、なぜこんなことを聞くかというと、パウロには、見れば分かるんです、

「これは本当に聖霊を受けているかどうか」ということが。聖霊が来ていなければ、結局、「について」という次元しかいかないものだから。今の神学者や教会の牧師さんたちは聖霊についても語ります。

3パウロ言う『されば何によりてバプテスマを受けしか』彼等いう『ヨハネのバプテスマなり』4パウロ言う『ヨハネは悔改（くいあらため）のバプテスマを授けて己に後（おく）れて来るもの（即ちイエス）を信ずべきことを民に云えるなり』

「イエスを受けとるべきことを、イエスに信入することを、イエスを体受することを」

です。信ずるという言葉が躓きになる。

「イエスは神さまの子であることを信じます。十字架の贖いをなさったことを信じます。復活なさったことを信じます」

なんて、事柄を命題的にいくら信じてみたってしょうがない。イエスを本当に受けとること。本当に受けとれば、こっちは同質に変えられていく。本来、神の似姿に造られている。神と同質に造られているのだから。

「ひと」というのは、

「霊止」（霊が止どまる）

と書く。神霊が止まっているものを霊止（ひと）というので、神霊が止まっていないひとは霊止でない。だから、20世紀は霊止でなしがたくさんいるわけだ。私たちは有難いことに、神霊が止（とど）まるところの事態に入れられてしまった。

●キリスト道

パウロはアポロの次元が見えてしまったわけです。どんなに雄弁であろうとダメだ。どんなに聖書に詳しかろうとダメなんだ。

5彼等これを聞きて主イエスの名によりてバプテスマを受く。6パウロ手を彼らの上に按（お）きしとき、聖霊その上に臨みたれば、彼ら異言を語り、かつ預言せり、

パウロが按手して聖霊が臨んだら、異言が出た。これを今度はまた金科玉条にして、「異言派」というのがある。

「異言を語らなければ聖霊は臨んでいない」

と決め込んでしまっているのがある。

7この人々は凡て十二人ほどなり。

「十二人」というのは不思議です。これはイスラエルにとっては完全数ですから。十二支派。キリストの弟子が十二人。しかし、数ではない。質なんです。アブラハムとエホバの神さまとの、あの創世記の会話でも。

「もし、この町に五十人の義(ただ)しき人があったら、赦してくださいますか。私は塵灰の如き者ですが、また申し上げますが、四十人ではいかがでございますか」と言って、段々せりおとしていった。そして、三十人、二十人、十人まできた。そこで話は終わった。けれども、もう一つ進んでいくと、あれは一人までくるわけです。エレミヤ記5章1節に書いてある。

「エルサレムにもし一人の義を求める者がいれば、このエルサレムを赦す」

と、エホバの神さまはエレミヤに言いました。エレミヤや預言者たちはみな単独者です。この一がものを言うんです。

「辛子(からし)種一粒の如き信」

という。私たちはキリストの原始力をいただいている「一」だから。あなた方はみな原始力的な存在なんだ、御霊がくれば。原始力的霊子なんです。これが凄い。これは、周囲に影響を及ぼさないではいられないところの存在である。

神さまは有りて在らしむる存在である。モーセに言ったのは、

「我は有りて在る者なり」

ではない。文法的にはそうかも知れない。けれども、私は文法の奥を読む。エホバの神さまの本当のこころは、まだモーセも受け損なった。

「我は有りて在らしむる者なり」

です。太陽は有りて地球を在らしめています。本当のキリストの僕たちは、婢たちは、有ることが周囲をして在らしめるひと。皆さん一人一人が存在即伝道です。人を救わんとする、聖霊の愛はそのようにして動かざるを得ない。何も特別な所で集会をしなくたっていい。けれども、日常の生活が即伝道なんです。いわゆる

「伝道、伝道」

と言って、なんか妙に伝道張るのはよくない。けれども、そんなことを言わなくとも、自然に伝道になる。私は「道」という字が大好きだ。

「キリスト道」

という。剣道、柔道という。みなこれ道なんです。技術ではない。

「我は道なり」

とキリストが言われたではないですか。キリストという、本当に道なんです。キリストは天の道、天道なんです。私たちは地路です。地路が天道に即する存在が本当の天道地路という。「路」というのは各々の足で歩くみちと書く。路が道に即する。それが本当の道路という。即ち、天と地が相即している在り方です。だから、あなた方一人一人はのっぴきならない路を歩いている。日本人が道の民であるということをもう一遍自覚しなければいけない。

●霊光・霊波・霊火

これがパウロのずばりの伝道であった。聖霊を与えなければ、伝道は本当の伝道でない。

8ここにパウロ会堂に入りて、三个月のあいだ臆せずして神の国に就きて論じ、かつ勧めたり。9然るに或者ども頑固になりて従わず、会衆の前に神の道を譏りたれば、パウロ彼らを離れ、弟子たちをも退かしめ、日毎にツラノの講堂にて論ず。

「講堂」という字は「スコレ」（英語のスクール）という字で、「暇」という字です。ギリシヤ人は暇のある者が学問をしたので、「スクール」というのは「暇つぶし」ということなんだ。そこがやっぱりギリシヤ的だ。

10斯すること二年の間なりしかば、アジヤに住む者は、ユダヤ人もギリシヤ人もみな主の言を聞けり。11而して神はパウロの手によりて尋常ならぬ能力ある業を行いたもう。

言葉ももちろん力をもっています。

「神の言はパウロを通して力があるが、更に業の上でも」

ということ。

12即ち人々かれの身よりあるいは手拭あるいは前垂をとりて病める者に著くれば、病は去り悪霊は出でたり。

驚くべきことだ。パウロの身につけているものに霊が伝わっているわけだ。それに触れると、病が治ったり、悪霊が出たりする。これは大変なことです。見る目をもって見れば、これはパウロから霊光が発していたに相違ない。霊波が流れている。仁王さんの回りに炎がたっているね、あれは霊火だから。

13ここに諸国遍歴の呪文師なるユダヤ人数人あり、試みに悪霊に憑かれたる者に対して、主イエスの名を呼びて『われパウロの宣ぶるイエスによりて、汝らに命ず』と言えり。14斯なせる者の中に、ユダヤの祭司長スケワの七人の子もありき。15悪霊こたえて言う『われイエスを知り、又パウロを知る。然れど汝らは誰ぞ』16斯て悪霊の入りたる人、かれらに跳びかかりて二人に勝ち、これを打拉ぎたれば、彼ら裸体になり傷を受けて其の家を逃げ出でたり。

云々と。

20主の言、大いに弘りて権力を得しこと斯の如し。

パウロはちゃんと霊をわきまえていますから、誤魔化しがきかない。キリストが、マタイ伝7章の終りの方で、

「我に対いて主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。その日おおくの者、われに対いて「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を逐

いいだし、汝の名によりて多くの能力ある業を為ししにあらずや」と言わん。その時われ明白に告げん「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。」（マタイ7・21～23）

「イエスの名によって私たちは病を癒し悪鬼を追い出し云々したと言っても、私は知らんぞ」

と、キリストは言われた。即ち、キリストの名をかりる悪いやつがある。そして、やることは悪くない。やることは悪くないんだけれども、それは御意に従っていない。霊の力を勝手に自分の気持でもって利用している。

「そんなものは知らん」

という。キリストのあの言葉は厳しい言葉です。いわゆる霊的宗教であっても、うっかりすると、そういう霊的傲慢になると、とんでもない。だから、キリストに

「我は知らず」

なんて言われてしまう。ですから、皆さん、このパウロの構造は本当にわきまえないといかん。

●捨身の祈り

21 此等の事のありし後パウロ、マケドニヤ、アカヤを経てエルサレムに往かんと心を決めて言う『われ彼処に到りてのち必ずロマをも見るべし』22 斯て己に事うる者の中にてテモテとエラストとの二人をマケドニヤに遣し、自己はアジヤに暫く留まる。

云々と。20章です。

1 騒乱のやみし後、パウロ弟子たちを招きて勧をなし、之に別を告げ、マケドニヤに往かんとて出で立つ。2 而して、かの地方を巡り多くの言をもて弟子たちを勧め し後、ギリシヤに到る。3 そこに留まること三个月にしてシリヤに向かいて船出せんとする時、おのれを害わんとするユダヤ人の計略に遭いたれば、マケドニヤを経て帰らんと心を決む。……6 我らは除酵祭の後、ピリピより船出し、五日にしてトロアスに著き、彼らの許に到りて七日のあいだ留まれり。

7 一週の首の日われらパンを擘かんとて集まりしが、パウロ明日いで立たんとて彼等とかたり、夜半まで語り続けたり。8 集まりたる高楼には多くの燈火ありき。9 ここにユテコという若者窓によりて坐しいたるが、いたく眠気ざすほどに、パウロの語ること愈々久しくなりたれば、遂に熟睡して三階より落つ。これを扶け起こしたるに、はや死にたり。10 パウロ降りて其の上に伏し、かき抱きて言う『なんじら騒ぐな、生命はなお内にあり』11 すなわ

ち復のぼりてパンを擘き、食してのち久しく語りあい、夜明に至り遂に出でたてり。12**人々かの若者の活きたるを連れきたり、いたく慰籍を得たり。**

パウロの按手の祈りでもって、息を吹き返したわけです。

キリストを信ずるということは生まやさしいことではない。

「主さま！」

と祈る時に、御霊が本当に内住しなければ、祈りには力が出てこない。主と一つになる。この一つの境地に入ったら、力が本当に作用してくる。ですから、それが本当の捨身の祈りです。

「主はなし給う、わがうちなる御霊はなし給う」

ということを100％に――99％ではない――本当に100％に受けとる。ちょっとした疑いもダメ。ちょっとした恐れもダメ。それを乗り超えさせてくださる。だから、キリストを信ずるとは、

「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして」

と、キリストが言われたのはそのことなんです。「尽くして」とは、

「一切を投げかけて、全身をもって」

ということです。力む尽くし方ではない。それが「ことごとく」ということ。

「ことごとくキリストの中に投げ入れなさい」

ということです。

●聖霊の囚人

ユテコという青年は落ちて息絶えたけれども、パウロはキリストの生命の熱をもって、甦らせてしまった。

17而してパウロ、ミレトより人をエペソに遣し、教会の長老たちを呼びて、

ミレトに来て、そこで別れをする時に告げたこの言葉は本当にパウロの遺言みたいな言葉です。

18その来りし時、かれらに言う『わがアジヤに来りし初の日より如何なる状にて常に汝らと偕に居りしかは、汝らの知る所なり。19即ち謙遜の限をつくし、涙を流し、ユダヤ人の計略によりて迫り来し艱難に耐えて主につかえ、

「謙遜の限りをつくし」

というのは、パウロはどこまでも自分を低くして、弱き者には弱き者となって、相手の中に本当に自分を入れて、何とかして救い上げようとする。だから、「謙遜の限りをつくし」というのは、彼は本当に

「どん底に立って」

ということです。自分はどん底に立って、涙を流して――謗るやつがあるし、反対するや

つがあるし、批判するやつがあるし、それから、いいかと思ったらどっこい脱線するやつもある――だから、パウロは本当に、涙を流したわけです。そして、

「キリストの十字架のことを語り、復活のことを語る」

という。パウロが中心に語っていることは十字架と復活です。とにかく、到るところでユダヤ人の迫害にあう。

「お前はとんでもない、大間違いだ、新興宗教になってしまった。あのイエスをメシヤと思うから、とんでもない冒瀆である」

なんていうわけで、いきりたつ。パウロがそのようにしていきり立っていたんだから。彼には彼らの反対がよく分かる。

「俺もかつてはそうだった」

というわけだ。

20益となる事は何くれとなく憚らずして告げ、公然にても家々にても汝らを教え、21ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対して悔改め、われらの主イエスに対して信仰すべきことを証せり。22視よ、今われは心搦められて、エルサレムに往く。彼処にて如何なる事の我に及ぶかを知らず。

「心搦められて」は間違いです。

「霊縛されて、御霊に捕らえられて」

ということです。

「自分は御霊に捕らえられてエルサレムに行くのである」

と。

23ただ聖霊いずれの町にても我に証して縄めと患難と我を待てりと告げたもう。

もう、迫害がくることを聖霊で知っている。けれども、

「自分は聖霊にしっかりと捕まえられているから、聖霊の囚人だから、ここに行くのが神さまの御意である」

というわけです。

●伝道の使命果てるまで

24然ど我わが走るべき道程と主イエスより承けし職、すなわち神の恵みの福音を証する事とを果たさん為には固より生命をも重んぜざるなり。

パウロは第二次伝道の時にコリントでテサロニケ前後書を書いた。それからエペソでガラテヤ書を書いている。というのは、第二次伝道でガラテヤに渡った時に、第一次伝道でせっかくキリスト教に変わったのが、またユダヤ教に戻ったのが大分いるものだから、それで彼は憤慨して、ここでガラテヤ書を書いた。それから、エペソに居た時に、ヨハネ黙

示録に出てくる七つの教会――エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤ――を訪ねていく。直接或いは間接に訪ねている。間接ということは、弟子を使って。それから、第三次伝道では、エペソではコリント前書を書いている。そして、コロサイへ使いを遣わしている。それからピリピでコリント後書を書いた。コリントでロマ書を書いた。

もうこれからエルサレムに行くのだけれども、自分は捕らえられる。けれども、福音のためには、主の御名のためには、走るべき道は走ったから、もう生命は惜しくない。

「神の恵みの福音を証する事とを果たさん為には固より生命をも重んぜざるなり」

と。パウロは死にそうな艱難に何回も遭っている。

「彼らヘブル人なるか、我も然り。彼らイスラエル人なるか、我も然り、彼らアブラハムの裔なるか、我も然り。彼らキリストの役者なるか、われ狂える如く言う、我はなお勝れり。わが労は更におおく、獄に入れられしこと更に多く、鞭うたれしこと更に夥だしく、死に瀕みたりしこと屡次なりき。ユダヤ人より四十に一つ足らぬ鞭を受けしこと五度、笞にて打たれしこと三たび、石にて打たれしこと一たび、破船に遭いしこと三度にして一昼夜、海にありき。しばしば旅行して河の難、盗賊の難、同族の難、異邦人の難、市中の難、荒野の難、海上の難、偽兄弟の難にあい、

同じクリスチャンでありながら、宗派根性で、クリスチャンがクリスチャンを迫害する。

労し、苦しみ、しばしば眠らず、飢え渇き、しばしば断食し、凍え、裸なりき。ここに挙げざることもあるに、なお日々われに迫る諸教会の心労あり。誰か弱りて我弱らざらんや、誰か躓きて我燃えざらんや。もし誇るべくば、我が弱き所につきて誇らん。永遠に讃むべき者、すなわち主イエスの神また父は、我が偽らざるを知り給う。」（コリント後11・22～31）

これだけの艱難にパウロは遭った。伝道旅行なんていったって、なま易しい伝道旅行でない。コリント後書は第三次伝道のときピリピで書いている。彼はそれだけのものに遭いながらまだ終わらない。伝道の使命が果てるまでは、神さまは彼を助けなさった。

リビングストンがアフリカの伝道をしました。ある時は、もう少しで獅子に殺されるところだった。獅子がリビングストンに跳びかかって、あわやかき裂こうとする瞬間に、土人が鉄砲で撃って獅子が倒れた。そういう瞬間がある。

「使命の終わるまでは神さまは守りたもう」

と、リビングストンも告白しています。

●弔合戦

そのようにして、地上における使命の果てるまでは、彼は進んでいく。伝道の使命を果たしてしまうと、神さまは天界に挙げてしまう。けれども、私たちに腑に落ちないこともちろんありますよ。

「どうしてあの人は仆れてしまったのだろうか」

と。私は私の兄貴について、そう言わざるを得ない。あの兄貴が27才で仆れた。兄貴は私が生きているよりかはるかに有能な、どの点からいっても私よりか上です。それが仆れた。そしてお母さんが失明してしまった。38年間失明生活です。

ある意味からいえば、兄貴は親不孝だよ、仆れてしまって。分からんです、私は。けれども、この二重のマイナスを私は受けとった。この兄貴は死ぬはずの兄貴ではなかった。母は本当に私たち5人を片腕でもって――父は私が5才のときに亡くなったから――育ててくれた。せっかくのところで、母は失明してしまった。どういうことか。その時は、私は暗澹としてしまった。窒息しそうだった。だから、この二重のマイナスは、私にとっては兄貴の

「弔合戦（とむらいがっせん）」

であり、私が生かされているのは、その使命を負って課題を負って生かされている。

私の兄貴、内村鑑三、藤井武、塚本虎二、手島郁郎の、この人たちに私は会わせられているということは本当に不思議な摂理なんです。私みたいな鈍器は、まだこれから何年もかからなければ仕事ができ上がらないから、それで神さまは私みたいな小っぽけな痩せた男だけれども、これを終りまで使おうとしていらっしゃるわけです。だから、そう簡単に仆れるわけにいかない。

パウロはローマに行って、エペソ、ピリピ、コロサイという書簡を書くまでは、神さまは彼を地上に置いておいた。この書簡はある意味においてロマ書以上の世界です。ちょうど、ベートーヴェンのシンフォニーの後のクヴァルテットみたいなもの。

とにかく、神の業は次から次へとバトンタッチしていくわけです。

「よし、その先を行こう」

と。藤井先生も内村先生が仆れた時に、

「これは無教会の礎定式であって、我々は屍を越えて突き進む」

と藤井先生は言った。

●幕屋の構造

パウロは全く、

「生命をも重んぜざるなり」

といって進んでいった。既にガラテヤ書で、

「**キリストと共に十字架せられたり、我れもはや生くるにあらず**」（ガラテヤ2・22）

と言ったパウロですから。エペソで第二次伝道のときにガラテヤ書を書いている。ガラテヤ書というのは戦闘的な書簡です。

「**人よりに非ず、人に由るにも非ず**」（ガラテヤ1・1）

といって、本当にキリストにぶっ倒されて立ち上がったパウロですから。恐らく、パウロくらい聖霊の火に燃やされたひとは無いでしょうね。

25 **視よ、今われは知る、前に汝らの中を歴巡りて御国を宣伝えし我が顔を汝ら皆ふたたび見ざるべきを。**

もうこれでお別れだと。先が分かっている。

26 **この故に、われ今日なんじらに証す、われは凡ての人の血につきて潔よし。**

27 **我は憚らずして神の御旨をことごとく汝らに告げしなり。**

何も恐れることはない。言うべきことは全部、水を割らずに言ってきました、と。

28 **汝等みずから心せよ、又すべての群に心せよ、聖霊は汝らを群のなかに立てて監督となし、神の己の血をもて買い給いし教会を牧せしめ給う。**

あなた方一人一人を

「二、三人わが名によりて集まる所」

の主催者として、神の国を展開していく。幕屋を展開していく。エクレシアを展開していく。

幕屋の構造はX、a、b、cという三角錐体です。私はこのように示された。神・キリスト（X、頂点）は大黒柱（垂線）。a、b、c（底の三角形の各頂点、各個人）は――幕屋の綱Xaという線、aは神・キリスト（X）という大黒柱に直結して――上から力が、生命が来ている。聖霊の生命がaを通るとbの方へ、bを通ればcの方へ、これは還流するわけです。「コイノニア」というのはそういうことです。

「自分たちがひとつ仲良くしましょう」

なんて、そんなのではない。上からくるから、自然にそうなってしまう。この空間（三角錐体の中）は聖霊です。これは聖霊の幕屋で、イスラエルの民が黙示録の最後に到るまで、これを張っては畳み、畳んでは張って旅をしていく。そういう人生の旅であり、神の民の歴史である、ということで、私は「幕屋」ということを言いだした。

このa、b、cは縦の関係（Xa、Xb、Xc）のあるところに平安がある。そして、それが流れると、これが人間関係の平和となる。先ず平安がないところには、絶対に平和は来ません。神と我とが一対一。それは一極絶対の一です。だから、人格は比較してはいけません。それぞれ絶対性を持っています。相対的存在でありながら、絶対性を持っている。

「あの人はどうだ、この人はどうだ」

と品定めしてはいかん。人格というものは比較を許さない。それぞれ天下一品です。

●深い涙のひと

29われ知る、わが出で去るのち暴き豺狼なんじらの中に入りきたりて群を惜まず、30又なんじらの中よりも、弟子たちを己が方に引き入れんとて、曲れることを語るもの起こらん。31されば汝ら目を覚しおれ。三年の間わが夜も昼も休まず、涙をもて汝等おのおのを訓戒せしことを覚えよ。

パウロというのは本当に熱情のひとでしたね。時々、「涙をもて」と書いてある。クリスチャンは一番深い涙のひとです。「涙」といえば、昔の預言者エレミヤは本当に涙の預言者です。

「18われ固にエフライムのみずから歎くをきけり云く汝は我を懲しめたもう。我は軛に馴ざる犢のごとくに懲治を受たり。エホバよ汝はわが神なれば我を牽転したまえ。然ば我転るべし。」（エレミヤ31・18）

「神さま、私を引き返してください。そうしたら帰ります」

と。「かえる」というヘブライ語の字は「コンバージョン」と同じ言葉で、「めぐらす」という字です。

「あなたが私を返してくださらなければ、私は悔改めができません。あなたが返してくださるから、私は悔改めができます」

という。

「私は悔改めますから」

と言って、こっちから言うのではない。

「私は自分で悔改めなんかできません。どうぞ、あなたが私を引っ張ってください。そうしたら、私はあなたの所へ帰っていきます」

と。帰り行くのも神さまの引力によって帰り行くんだ。そのあとにちゃんと書いてある。

「19われ転りし後に悔い教を承しのちに我が脾を撃つ。」（エレミヤ31・19）

と。悔いてから帰って行ったのではない。帰ってから本当に悔いた。あの「放蕩息子」の方は

「ああこれはしまった」

といって帰ってきた。けれども、エレミヤは、神さまに帰されてから、

「ああ、悪かった」

と言う。何か少しずぶといようだね。けれども、これが本当なんだ。パウロがそうだ。反対して逆らっている時に、ひっくり返された。そして彼は本当に回心した。すべて本願の力が一切を為していく。

「それでは、本願があるから、どうもしないでいい」

なんて、そういうことではない。本願に対して、こちらは悲願をもつ。一生懸命で悔改めようとする。悔改めようとすることは大事なことだ。けれども、それによって、悔改めにこない。

「求めよ」

と、キリストが言ったのはそうなんだ。

「帰り来たれよ」

と。そういう「求めよ」とか「帰り来たれよ」とか言う前に、キリストの方では、神さまの方では、

「私はお前をこんなに求めているではないか、私の力を受けろ」

と求めておられる。だから、その気持が起きてくれれば、神さまの力が、キリストの力がグッと働いてくるわけです。本願に気が付くわけです。

小さな子供が道で倒れて、

「お母ちゃーん！」

なんて泣くね。お母ちゃんの方は子供が泣くよりか先に、子供はどこにいるだろうかと、ちゃんと探し求めているわけです。母親というものはそういうものです。

●南無キリスト

そして今度は、キリストにくると、本願はもう成就しているんだ。本願が現在完了している。

「私の十字架で全部お前は済んでいるではないか」

と。全部、済んでいる。

「自我、自我といって、私は頑くなでどうにもなりません。どうかしてください」

なんて言うけれども、もうすべて救いは十字架で完了している。キリストはもう一遍、十字架に架かろうとしているのではない。十字架は一遍だけ。これはヘブル書に書いてある。

「ただ一たび十字架に架かって贖罪を終え給えり」

と書いてある。もう、あるがままにして贖いとられているから、その贖いとられたところには聖霊が来ているから、ひたすらにキリストを受けとることだけです。自分の側は見る必要はない。いいよ、自分は破れで。知らない間に、その破れが天衣無縫的になってしまっている。八方破れの天衣無縫という。

宮本武蔵の構えがそうです。八方破れですきだらけ。隙だらけだけれども、これに打ち込めない。まだ構えている構えはダメなんだ。構えざる構えというのがある。これが八方破れの構えです。剣を持っているけれども、剣を持っていない。無剣の剣という。無剣の剣で、もう敵は「参りました」という。

何をやるにしても、学問でも芸術でも――特に芸術はそうですけれども――宗教の本当の深い境地――それが仏道であろうとキリスト道であろうといいです――その本当の境地に入ったならば、何でもござれです。台所で仕事をするのでも、針仕事をするのでも、水仕事でも、何でも。ピアノを弾く人はピアノが、作曲する人は作曲が、何でも、これが展開していく。

上からキリストの霊が来たら、これはもう本当に、これと比べるものは何ものもない。聖霊は全世界とも代えることができない。この福音に入ったら、私たちは後退を知らん。限りなく前進あるのみ。そして、また、それを限りなく人に分け与えていく。泉は滾々として湧きいでて流れていくように。

32 **われ今なんじらを、主および其の恵みの御言に委ぬ。御言は汝らの徳を建て、すべての潔められたる者とともに嗣業を受けしめ得るなり。**

けれども、パウロから本当に聖霊を受けていた者が一体何人あるか、それは分からんですよ。テモテなんていう弟子は大事だから、テモテ前後書なんかがあるわけです。

33 **我は人の金銀・衣服を貪りし事なし。** 34 **この手は我が必要に供え、また我と偕なる者に供えしことを汝等みずから知る。** 35 **我すべての事に於て例を示せり、即ち汝らも斯く働きて、弱き者を助け、また主イエスの自ら言い給いし「与うるは受くるよりも幸福なり」との御言を記憶すべきなり』**

「しっかり覚えていろ」

と。与えれば与えるほど、上からまた与えられるんです。金銀のある人は大いに金銀を与えてくださいよ。けれども、ペテロは金銀がなかったものだから、

「金銀は我になし、我がうちにあるものを汝に与う。イエス・キリストの名によりて歩め」

と言った。ペテロが持っていたのは、イエスの御名であった。御名を持っていた。御名即聖霊です。御名の中には聖霊がこもっている。聖霊がこもっていない御名なんていうものは御名ではない。

「南無キリスト」

が、私たちが持っているところの御名であります。「南無キリスト」というのは福音と仏教とを渾然と一つにしてしまった言い方だ。

東西もなければ南北もない。東西南北という方角に絶してしまって、至るところこれ東、至るところこれ西、至るところこれ北、至るところこれ南。地球がそうだ。どこへ行ったって、西から西へいくとまた元へ帰ってくる。東から東へいくとまた元へ帰る。北へ行っても南に行っても同じこと。球というのは面白い。福音の世界の本当の姿はやはり円現なんだ。球現といってもいい。

だから、太陽、日本の国旗は最高の国旗です。円現の相です。光にして愛にして生命なるもの、これを太陽が現している。福音を太陽が現している。素晴らしいですよ。この日本の国旗をいい加減に思ったら、日本人はみずから滅びるよ。そういう素晴らしい、宇宙的な角度からの自覚をしなければ。

パウロはそれだけのことを滾々と語りました。

36 **斯く言いて後、パウロ跪づきて一同とともに祈れり。** 37 **みな大いに歎きパ**

ウロの頚を抱きて接吻し、

この「接吻する」という言葉はギリシヤ語で非常に力強い言葉です。

38**そのふたたび我が顔を見ざるべしと云いし言によりて特に憂い、遂に彼を船まで送りゆけり。**

まことに劇的なシーンですね。この別れは何とも言えない。パウロは本当の伝道者でした。

●パウロの弁明

その先は、要するに、ミレトからカイザリヤに行って、エルサレムに行くわけです。パウロは囚われることを知りながら、そこで囚われる。そのことはもう聖霊に示されている。21章です。

13**その時パウロ答う『なんじら何ぞ歎きて我が心を挫くか、我エルサレムにて、主イエスの名のために、唯に縛らるるのみかは、死ぬることも覚悟せり』**

カイザルに訴えることによって、遂に本当に囚われることになる。ローマへの捕囚が始まる。それが21章15節から28章まで続いているわけです。22章にパウロの弁明があります。

1**『兄弟たちよ親たちよ、今なんじらに対する弁明を聴け』**2**人々そのヘブルの語を語るを聞きてますます静かになりたれば、又いう、**

相手がユダヤ人だから、ヘブル語で語った。そこで例のコンバージョンのことが出ている。

7**その時われ地に倒れ、かつ我に語りて「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか」という声を聞き、**8**「主よ、なんじは誰ぞ」と答えしに「われは汝が迫害するナザレのイエスなり」と言い給えり。**

パウロはまた思い返して言っている。彼らに弁明しながら、

16**今なんぞ躊躇うか、起て、その御名を呼び、バプテスマを受けて汝の罪を洗い去れ」**

なんてことを言って、やっている。

19**我いう「主よ、我さきに汝を信ずる者を獄に入れ、諸会堂にて之を打ち、**20**又なんじの証人ステパノの血の流されしとき、我もその傍らに立ちて之を可しとし、殺す者どもの衣を守りしことは、彼らの知る所なり」**

そのように私は悪いやつでありました、という。

今度は23章で、パウロは議会で大祭司アナニヤの前で演説をまたやっている。

1**パウロ議会に目を注ぎて言う『兄弟たちよ、我は今日に至るまで事毎に良心に従いて神に事えたり』**

云々と。その演説の後、

11**その夜、主パウロの傍らに立ちて言い給う『雄々しかれ、汝エルサレムにて我につきて証をなしたる如く、ロマにても証をなすべし』**

と、キリストにまた告げられて、そのようにパウロは実行していきました。ユダヤ人の盟約のことがその次に書いてある。

それから、パウロはカイザリヤに向かって行く。ペリクスの前でパウロは演説をまたやる。24章に書いてある。

1五日ののち大祭司アナニヤ数人の長老およびテルトロと云う弁護士ともに下りて、パウロを総督に訴う。2パウロ呼び出されたれば、テルトル訴え出でて言う『ペリクス閣下よ、われらは汝によりて太平を楽しみ、

云々といって、パウロは訴えられる。

5我等この人を見るに恰も疫病のごとくにて、全世界のユダヤ人のあいだに騒擾をおこし、且つナザレ人の異端の首にして、6宮をさえ瀆さんと為たれば之を捕えたり。

ペリクスの前でパウロが、

14我はただ此の一事を汝に言いあらわさん、即ち我は彼らが異端と称うる道に循いて我が先祖たちの神につかえ、律法と預言者の書とに録したる事をことごとく信じ、15かれら自らも待てるごとく義者と不義者との復活あるべしと、神を仰ぎて望みを懐くなり。

と、向こうの、ユダヤ人の気持を逆用しているんです、

「私はちゃんとやってきましたよ、間違えては困りますよ」

というわけで。それから、今度は25章にいきますと、

1フェスト任国にいたりて三日の後、カイザリヤよりエルサレムに上りたれば、

というので、パウロはカイザルに上訴することになりまして、今度は、アグリッパ王の前でパウロが演説することになる。これが26章です。アグリッパとはヘロデ王のアグリッパ一世の子供で、この頃30才くらいです。

1アグリッパ、パウロに言う『なんじは自己のために陳ぶることを許されたり』ここにパウロ手を伸べ、弁明して言う、2『アグリッパ王よ

云々といって、滔々とやった。この時もまたダマスコ途上のことが出てきます。12節あたりから18節くらまでのところ。そして、24節で、

24パウロ斯く弁明しつつある時、フェスト大声に言う『パウロよ、なんじ狂気せり、博学なんじを狂気せしめたり』25パウロ言う『フェスト閣下よ、我は狂気せず、宣ぶる所は真にして慥なる言なり。

云々と。そして、

28アグリッパ、パウロに言う『なんじ説くこと僅にして我をキリステアンたらしめんと為るか』29パウロ言う『説くことの僅なるにもせよ、多きにもせよ、

神に願うはただに汝のみならず、凡て今日われに聴ける者の、この縲紲（なわめ）なくして我がごとき者とならんことなり』

「私は縲紲（なわめ）にかかっているけれども、あなた方も私のように本当にキリストを受けとるひとになってもらいたい」

と言って、彼は決して屈しない。

●ローマへの船路

それから、ローマへ船でいく。ユーラクロンという暴風雨にあって、難破してしまう。27章です。

14 **幾程もなくユーラクロンという疾風（はやて）その島より吹きおろし、15 之がために船は吹流され、風に向かいて進むこと能わねば、舟を風の追うに任す。**

けれども、パウロは、嵐で破船にあっても決して溺れないことをはっきり言っている。彼らは疑うけれども。

31 **パウロ、百卒長と兵卒らとに言う『この者等もし船に留まらずば、汝らは救わるること能わず』32 ここに兵卒ら小船の綱を断ち切りて、その流れゆくに任す。33 夜の明けんとする頃パウロ凡ての人に食せんことを勧めて言う『なんじら待ち待ちて、食事せぬこと今日にて十四日なり。**

云々と。そういうことをみんな指示を与える。これは、パウロは何も航海者ではないけれども、示されてやっているわけです。それから、マルタ島では毒蛇に噛まれたけれども、毒が廻らない。だから、

「この人は神なり」

と言って、みな驚いた。28章です。

5 **パウロ蛇を火のなかに振り落して何の害をも受けざりき。人々は彼が腫（は）れ出づるか、または忽ち（たちま）倒れ死ぬるならんと候う（うかが）。6 久しく窺（うかが）いたれど、聊か（いささ）も害を受けぬを見て、思いを変えて、此は神なりと言う。**

と。

「18 **蛇を握るとも、毒を飲むとも、害を受けず、病める者に手をつけなば癒えん。**」

（マルコ16・18）

と書いてあるとおり、聖霊の器は驚くべきものです。毒にも打ち勝ってしまうんだから。

●「パウロ・イスト・ニッヒツ」

カール・バルトが『ロマ書の註解』の中でこういう言葉を発しているので、私は驚いた。

「パウロは無（ニッヒツ）であった」

と。私はうっかりしていた、バルトがそういうことを言っているとは。さすがはバルトです。

バルトの『ロマ書の註解』が今までの神学をひっくり返してしまったんだから。

「パウロは無であった。キリストの前に彼は本当に無き者であった。パウロがもしこの〝ニッヒツ〟（無）という場から去って、それから後退して、自分が何者かとなるようなことになったならば、それは彼にとって正にあぶないことである」

ということは、

「彼は非常に自らを誇る自信の強い、自我の強い男だから、もし、〝ニッヒツ〟から退いたら、それが彼にとってはむしろ危険であった」

ということ。もちろん、その〝ニッヒツ〟は十字架から賜った〝ニッヒツ〟です。やはり、バルトくらいな非常に桁違いな神学者となると、そういうことは見えている。この、

「パウロ・イスト・ニッヒツ」（パウロは無である）

には、私は驚いてしまった。もちろん、私がパウロを言っているのは、全くそのことであります。バルトに言われるまでもなく、彼は本当にキリストに在って自分が本当にぶっつぶれました。これは、ピリピ書やコロサイ書をやれば、大変いいわけですが、もうその時間はありませんけれども。

そういうわけで、パウロは、自分をぶっつぶしていたのではなくて、ぶっつぶされていた。キリストで本当にぶっつぶされていた。

●キリストを体現していく

私たちは――乱暴なものの言い方をしますけれども――不徹底でいいんですよ。自分で徹底しようと思ったら、苦しくなります。人間というものはドラマチックな構造なんです。どうやったって、これはダメなんだ。まぁ、ダメでない人があったら、どうぞやってみてください。大事なことは徹底的に――この場合は徹底です、これは自分が徹底するのではなく、相手が徹底している――キリストは徹底的に自分を贖いの羔（こひつじ）として、私たちに全的に与えてくださっている。キリストの側は全的なんです。だから、私たちはこの全的なキリストによって、不徹底な私たちの中に、

「もう、私はお前を贖いとった」

という事実が私たちの中にものを言っている。事実であって、ただ言葉ではない。

「十字架の言葉は……」

とパウロが言ったのは、

「十字架というこの事実の言葉」

なんです。これが私を本当に根底から贖いとってくださっている。自我はすっ飛んでいる。相対的な我々は死にいたるまでダメ。けれども、すっ飛んでいる。そのことに気が付いてください。気が付つくのは祈りの世界で気が付いていただく。祈りの世界で気が付くと、パウロと同じように――言葉はおかしいけれども――ぶっ倒される。祈りにおいて気が付

く、

「ああ、そうだ！」

と、これはぶっ倒れる。私はぶっ倒れたんだから。

「[3]**幸福（さいわい）なるかな、心の貧しき者、天国はその人のものなり。**」（**マタイ５・３**）

という言葉が、

「恵福（さいわい）なるかな、汝、わが十字架によって霊が貧しくゼロとされた者よ。自我がすっ飛んで、魂が本当に貧しきの、どん底にお前を置いてやった。天国即ち聖霊の我れ、汝の中にあり」

と響いてきたから、私は本当にその時に畳の上に平伏してしまった。だから、そのようにして、もう完全に救いとられているから、天国、聖霊の我れ、聖霊のキリストが入っていらっしゃる。

これにはかなわない。私はどんなに頑張ったって、十字架にもかなわなければ、聖霊にもかなわない。だから、ありがたい。人間の生まれつきの私という相対的な者がどんなに頑張ったって、これにはかなわないから、

「参りました！」

と降参する。負けながら、いよいよ力強く、力をいただいていく。自分の状態が潔いとか潔くないとか、愛が深いとか浅いとか、そんなことは問題でなくなってしまう。

「ただキリスト、あぁうれしい」

と言って進んでいく。そして、キリストの生命をどしどし与えていく。どしどし与えていけば、何か知らんけれども、キリストと同じように、段々されていく。

「ついにキリストの姿に化するなり」

という。「化するなり」ではなく、化せられていく。地上では、三日月でいい。しかし、これは満月に必ず成る。

どうですか、皆さん、もう問題はないじゃないですか。すったもんだなんか、みんなすっ飛んでいってしまう。いいですよ、人間だから、お互いに間違ったり、いろんなことをするさ。お互いに赦し、担い、忍び、助けていくだけのはなしです。これは聖霊の愛がしていく。決して、人を裁かない。それが本当にキリストを体現していくことであります。

●祈り

祈ります。主さま、御前に平伏さざるを得ません。本当にありがとうございました。この破れ器をお使いなさって、あなたは私の言葉の奥から言葉を発し、私の祈りの奥から祈りを発し、この兄弟姉妹たちに伝えてくださいました。感謝いたします。私は何者でもありません。使徒パウロが事実をもって私たちに語りかけてくれました。

この伝道の片鱗を承り、それに接し、私たちも「パウロさん」と言って、本当に天界の

親しい先輩としてパウロさんを天界に置いて、進んで行きます。あなたに全的に動かされたパウロの如く、また私たちも全的にあなたによって捕らえられて、福音の証者として、この兄弟姉妹たちはいよいよ進んで参ります。

私たちの側はあなたから見れば、まことに気の毒な者ですが、しかし、あなたは決して私たちを、その意味においてご覧にならないで、いつも御名の故に私たちを赦し、御名の故に私たちを強め、御名の故に使ってくださるから、感謝であります。

一日を一生とし、一日を永遠として、毎日毎日を全的に、

「躓いても転んでも滑ってもただ前進あるのみ」

と言って、進ましめてくださらんことを切に願い奉ります。

そして、人々の助けとなり……、敵を愛するところのあなたの聖霊の愛が一切をなさしめてくださいますから、感謝であります。

神さま、もはや言葉を絶します。どうぞ、東西南北から集まってきたところの、兄弟姉妹たちを限りなく展開せしめ、のっぴきならない天下一品としてお使いくださらんことを切に願い奉ります。私たちは御名を讃えつつ進んでいきます。そして、また会う時に、お互いに目を輝かして喜び勇んで、また進むことができますように、切に願い奉ります。あなたの御国を目指して、御国をきたらせたまえと全存在をもって祈りつつ進んでいきます。

まことに尽くしませんが、兄弟姉妹たちの全身に溢れるところの感謝と讃美と希望とともに、主イエス・キリストの御名により捧げ奉る。アーメン。